

私の保育

村石京子

保育者というものは、誰しも保育に対するある理念をもっていると思う。この理念というものが、保育における情熱とつながり、行動となり実践されて形をおこしていくのである。

ただ、その思うところがあまり強くありすぎると思理に走りすぎて、その求めているところが実際とはほど遠い空手形におわってしまったり、ある場合は教師のカラーを強く出しすぎて子どもたちを色づけしてしまったりすることがある。また、現実の子どもとの姿とはかみ合わないで、ただ新しさをたずねるような行き方となったり、あるいは几帳面に組みたてられすぎて子ども

の側は身動きがとれないような教師の自己満足的なカリキュラムが作成されたり、ある場合は教師の実験材料的に子どもが扱われたりすることがある。それでなくても、

自分の担任するクラスの雰囲気はどうしてもある程度はその教師の持味や個性で影響されることは、良い場合も逆の場合も避けられないものと思ふけれど、そのことで一人一人の子どもの個性までも押しつぶしてしまうような強い教師の色彩はあまりのぞましいものとは考えられない。しかしそうかといって、何ももたずに教育の場に臨んでよいものであろうか。何も考えずに子どもたちと日々を過ごすだけでよいのであ

らうか。そんなことでは教育の前進は見られないのではないだろうか。日々安穩に楽しく過ごせれば最良という程、保育とは単純なものではないだろう。

一人一人とふれあい、一人一人をいかす保育をということはよくいわれる。私もこれが大切であり、保育の基となる考え方と思ふし、私どもの園の保育のあり方もこの心を根底としてなりたっていると考えている。しかし角度を変えて見てみると、一人一人がよければそれで全てよいのではなく、やはり年齢にあった全体的な指導というものも必要と思われてくる。また、系統だった教育のプログラムというものも軽んじられないとも思う。それなら保育の中でそのバランスはどのようにあつたらよいのであろう。確かに自分から考え、自分から創り出し、自分から行動する幼児の行動は活気があり、心があり、そして子どもらしい生き生きしさに満ちている。統制されて

鬱積した気持ちの代りに意慾がみなぎっている。しかしある場合には、教師の適切な教育的配慮にもとづくよりよい刺激によって、新しいあそびが展開されたり、かたよりのない経験をつみ重ねることが出来たり、新しいものの見方が出来るように成長することも多い。これが子どもたちをよりよく成長させていく教育というものだと思う。だが、その度合があまりに濃ければ、やはり子どもを引きまわしてしまふ結果にもなる。どのような場面での、どのような指導が、最も適切とされるのだろうか。

こんなことを考えれば考える程わからなくなり、日頃思い悩みながら日が過ぎていった。そして年度が改まって四歳児の一期を迎える日がきた。

今年はどうな子どもたちがこの級に入ってくるのだろうか。そしてどんな級が出来上って行くのだろうかと思う心は、これから幼

稚園に入園する子どもが、幼稚園とはどんなところであるかと楽しみであったり、一方不安であったりする気持と、立場は違

つてもどこか相通じるものがあるかもしれない。実際のところ、四歳児を担任することももう数回にはなるので、おおよその四歳児の概要というものはとらえることが可能であるけれど、それは今までの四歳児のクラスの子どものことであって、決してこれから新しく迎える子どもたちの姿ではない。例えばトランプとか百人一首のようなものならば、はじめは個々ばらばらに見えていたものが度重なればすっかりその中味を知ってしまうし、次はこれとこれがあうというようなこともわかってくる。しかし、教育というものは年数を経ても決して以前の経験で今回がはかれるというものではないし、相手というものはその度に全く新しいのであって、以前のことからびったり重ねて考えるというようなことも出来

ないのである。これが教育というものの難しさともいえるし、うまみであるともいえるよう。

そして、そのスタートに当るとき私はこう考えていた。早くクラスのもとまりをもとうとか、グループでのあそびを展開させていこうとかするのではなく、とにかくあるがままの子どもを受け入れて、一人一人の心を知れることを今学期は自分の中心的課題としてじっくりとやってみよう、と。子どもにも新しい経験をとか、よい指導をという気持もあるけれど、これが先立つとどうしても概括的な活動の方に教師の目が向けられがちになり、子どもの心を見ることが弱くなる。ある活動を見ていてそのあそびをより発展的にやってみようとか、みんなの経験としてひろげようとかいう気持になっってしまう。何かプランを起こした場合も、順調ののってこない子どもがいると、その子どもの中の内を思うよりもその活動に子

どもが早く参加することをねがってしま
う。しかし、もしかしたら子どもにとつ
て必要なのはそんなことより、「ママ」っ
て呼ぶ代りに先生のそばに行つて「せんせ
い」とちょっと呼んで見ただけかも知れ
ないし、一しよに手をつないでほしいの
かもしれない。こういう子どもの心をくみ
つてあげることを忘れて、何かいそがし
げに動きまわっている教師は、子どもに遠
いものに見えてきて、その大切なスタート
で子どもは教師に向かつて心を開くこと
をしないで過ぎてしまうだろう。どの子
どもも、一人一人をよく知るから出発し
ていこうと思つた。

例えば入園当初には、親から離れられ
ないで泣く子どもやあそべないでじつと
いる子どもがいる。親から離れるのをい
やがる子どもはいつになつたら一人だち
出来るだろう。あそべないで傍観して

もは何かきつかけであそび出せるだ
ろうと、この時期いつも私は困惑する
ことがある。そして泣く子どもを毎朝
こちらの手にひきとったり、あそべない
子どもにはあそびの仲間入りするこ
とが出来るとなつては誘つて、あそび
の仲間に入らせる。そして泣いてい
た子どもはやがて泣かなくなつて元
気になり、あそべないでいた子ども
も、この間のあそびがきつかけにな
つて友だちとあそべるようになる。そ
うすると一応「よかつた、Aちゃん
は泣かなくなった」「Bちゃんもあそ
べるようになるよ」と教師を安心さ
せてくれる状態に見えるが、それが
その子どもにとって最も適切な処置
であつたのだろうか。教師が無理に
見ると疑問がある場合もある。教師
があつたのだらうか。もっと個人
個人の人格を大切にすれば、泣く子
どもを無理に親から引きとつたり、
はたしてやりたい

と思つていたかどうかもわからない
あそびの中に安易に子どもを入れ
こんで安心してしまふようなこ
とは出来ないわけで、もっとも
子どもをゆつくり見守つてあ
げることのほうが大事なのでは
ないだろうかと思つた。

もちろん、私は担任の教師であつて、
観察者ではないのだから、子ども
の状態をただ見守つていけばよ
いのではなく、適切なとき手助け
をしたりアドバイスを加えるこ
とが必要なのである。ただこれ
にはよく子どもを知ることの基
礎があつてこそ、その子どもの
のぞむことが充分理解出来る
のだと思ふ。一人一人を大切に
する保育というのは、子どもが
充分活動出来ればそれでよい
のではなく、子どもの人格を
かけがえないものとして大切
に扱ふ心からはじまるのだと思
ふ。

見せかけの安定やまとまりを求
めてあせてはいけな
いのだと自分自身に語つた。

このためだろうか、毎日十時過ぎまで母親とあそんでいたKちゃんが納得して親から離れるようになり、部屋の中央にじっとたずんでいたN子ちゃんがあそべるようになったのは、いずれも五月を半ば過ぎてからである。いつもよりその期間は長かかったようだが、いずれもあまり強くこちらからひきこむようなことはしないで過ぎた。水がゆっくりと流れていくような自然の動きであったので、ある日を境目としてというようなはつきりとした区切りはなかった。もっと早い時期にその折が得られるように教師が手助けしたのと、このように自然に子どもの成長を待って来たのと、どちらの方がよいかは、まだ私にははつきり言い切る自信はない。

またこの子たちとは違って出だしは大丈夫であったのに、五月病にとりつかれたように幼稚園がいやになったF子ちゃんや、急に心細さがつのって「何だか涙が出ちゃ

う」と泣いていたSちゃんもその後をのりきって、やっと現在は明るい表情を見せてくれるようになってきた。そして幼稚園の庭の山までクローバーをつみに行っては、クローバーの咲き揃ったマットにねころんで「いい気持の幼稚園、大好き」と言ってくれるようになった。やはり待っていてよかったのだなと思うことも多い。そして一学期も終りに近い現在の子どもたちを前にして、私は今こういうことをのぞんでいるのである。

先の子どもたちとは別に、クラスには元気がありすぎてにぎやかだったり、調子にのったりする子どもたちがある。この子たちの旺盛な活動力、たくましいエネルギーをだんだんと深い創造力、あそびへの工夫に向けていきたいとねがっている。これによってあそびそのものの発展やたかまりもある。そしてそれ以上に今思うことは、あそびの中でのルールを守り、自分の行動に

よって他へ迷惑をかけないようにすることを覚え、その心から次第に他を思いやる気持をもつように成長してほしいということである。

もちろん、伸び伸びとした、おおらかな、明るい子どもに育っていくようにとねがう気持は強いが、子どもの心の成長にはそれだけでは充分とはいえない。最近の親の年代が新しい教育を受けた時代の人たちとなつているためか、自分の意見などは比較的はつきり述べられるようになってくるのには感心することもある。しかしその反面、相手の立場にたつてものを考えるところということがどうも乏しいようである。そして親は子どもの鏡であるので、発表型の社会的な子どもが多くなっているが、自分だけければという行動をとる子どもも多い。これは何も現代の子どもだけでなく、自己中心性の強いものの見方、行動というもののはどの時代にあつても幼児の特性なの

かもしれないが、特に現代のように核家族の中で育っている子どもは、家庭の中で相手を尊敬したり、いたわったりという気が自然と芽生えていく環境にはないということも要因となっている。自己主張ばかり強い人間が多くなってしまう。人間社会の中に暖かみや思いやりのある関係が乏しくなってしまう。人の心の暖かさというものは、人が人とふれあうときおのずから学び得ていくものなので、お互い同志の影響も大きい。幼ない子どもの中にやはり優しい思いやりのある気持を育て、お互いの関係をまろやかに進めていきたい。今は級という小さな単位の社会ではあるが、その中で小さな社会人として一人前になるには、個人の主張や我を通すのではなく、言いたいことははっきりと言えるけれど、自分さえよければそれでよいというような気持でなく、相手のことも考えるというように心の成長があつてほしいとねがつ

ている。幼児期は人格形成の大切な時期として、このことは常に考えているが、今年はこの相手を思う気持が幼ない子どももの心にも通じてほしいと強く思うのは、軽度ではあるけれど障害のある子どもを担任するようになったからであるうか。日頃はこの子がこれから先、乗り越えて行かねばならない道のりを思つて、特別にいたわつたりするのではなくて他の子と同じに扱つていくつもりであるが、やはり身近に担任してみると、障害をもつ子どもの親の痛みがほんの少しだがわかつてきたようなこの頃である。

そしてこの子を含めて級の子ども一人一人が受け身でなく、自分で行動し、自分で考え、自分で伸びていこうとする力強いたくましい心と、優しさと両面をもつた子どもに育つてほしいとねがいながら日々を送っている。

それにしても教育というものは、何年教職にあつても決してくり返して出来るものではないということは先にものべた。そして新しい子どもたちを迎えるたびに、「私の保育」というものは新しく生まれかわり、新しいものを形づくっていくものであり、教師自身もまた新しい子どもたちを教えてもらうことが何といると多いことであろうか。

そしてそう思えばなおさらに、日々の保育が、教師一人の与えることが中心になる保育によっては充分なものがあるうはずはなく、一人一人の子どものもつよい性格をひき出し、伸ばすことを教師は手助けし、それによつてお互いがお互い同志、子どもたちはもちろんだが、教師も一しょに学び育つて成長していきたい、そのような関係をもちたい、そのような教育をこれから進めていきたいと思うこの頃である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)